

日本に溢れる自然が 多彩な藍色を育んだ

明治時代に来日した外国人が「ジャパン・ブルー」と絶賛した「藍色」は「甕覗き」と呼ばれる淡い藍色から、黒く見えるほどの濃紺まで、実にさまざまなバリエーションがある。そこには日本人のどんな感性が働いていたのか。全国の藍染めにまつわる地を歩いて『藍―風土が生んだ色』『藍Ⅱ―暮らしが育てた色』を上梓した民俗学者の竹内淳子さんに、藍染めの起源を含めて「藍と日本人」についてお聞きした。

古代エジプトまで

遡る藍染めの歴史

水色、浅葱色、空色、露草色、縹色、紺色など、藍にはさまざまな色があります。これら美しい藍の色を生み出すのは、藍色の色素を含む含藍植物です。藍色の色素をもつ植物は、枯れても葉が藍色をしているので識別できます。

藍染めに用いられる含藍植物は世界に広く自生し、また栽培されていますが、日本では主にタデ科の一年草の蓼藍が用いられています。蓼藍はかなり昔に中国から日本へ渡来した染料植物です。また、沖縄や台湾、東南アジアではキツネノマゴ科の琉球藍が、インドを中心とした熱帯・亜熱帯地域ではマメ科のインド藍が、ヨーロッパではかつてアブラナ科のウォード（大青「たいせい」）が用いら

れていました。

藍染めの歴史は、紀元前2000年のエジプトに遡るといわれています。エジプトの古代都市テーベの古墳から出土したミイラに巻かれていた麻布が藍染めとされているので、含藍植物は葉をちぎって布にこすり付けても染まりますので、私は生葉染めだったのではないかと考えます。また、紀元前2〜3世紀にペルー中部の太平洋岸で栄えたパラカス文明の遺跡から、藍染めの木綿の布が出土しています。

その次は紀元前1世紀の中国です。儒教の経書の一つである『礼記』に「民ニ令シテ藍ヲ刈リ 以テ 染ムルコト 毋シム」とあります。民に令してとあるので「藍を刈らせるが、染めに使ってはならない」と藍染めを禁止したようです。藍は染料だけでなく薬用としても利用されていたので、そのための禁止ではないかと思えます。

もう一つ付け加えるならば、紀元後40年から70年ごろに成立したとされる、古代のインド洋近辺における海洋貿易について記した航海案内書『エリユトウラー海案内記』には、含藍量の高いインドの藍がカリカット（ゴージコードの旧称）から地中海方面



竹内 淳子 さん 民俗学者 たけうちじゅんこ

東京生まれ。大妻女子大学卒業後、同大学に勤務。現在、大学講師(専門は民俗学)。「ものと人間の文化を研究する会」主宰。各地への講演のほか、執筆活動が続ける。『藍一風土が生んだ色』(法政大学出版局1991)、『藍Ⅱ—暮らしが育てた色』(法政大学出版局1999)など著書多数。また、『日本民俗大辞典 上巻・下巻』(吉川弘文館1999,2000)に分担執筆。

に輸出されていたと記されています。

少し遡りますが、紀元前3世紀の中国では、思想家・儒学者の荀子(じゆんし)が「青ハコレヲ藍ニ取りテ 藍ヨリモ青シ」と書き残しています。これはよく知られているように「出藍(しゆらん)の誉れ」ですね。藍草で染めた布は藍草よりも鮮やかな青色となることを弟子と師匠の關係にあてはめ、弟子が師匠の学識や技術を越えるという意味です。

このような痕跡を辿ることで、私たちは古代の藍のことをほんの少し知ることができます。

『万葉集』に見る

日本の藍染め

では、日本の藍染めはいつ始まっ

たのでしょうか。「日本の植物学の父」と呼ばれる牧野富太郎は「藍は非常に古く日本に入ってきた植物だ」と述べていますが、「正確な年代はわかっていません。

奈良県天理市成願寺町にある古墳時代前期の下池山古墳から、鏡と一緒に絳青(こうせい)縵(まん)という赤と青の絹織物が出土しました。この青は藍で染めたものとされていますが、こうした証拠はなかなか出てきません。そこで重要になるのが『万葉集』です。

実は『万葉集』には藍に関する句がいくつもあるのです。例えば「麻衣(あき)に青衿(あおくびつ)著け……」(九卷一八〇七)。この青衿とは、麻の着物の衿だけを絹にして、藍を生葉染めたものだと私は考えます。衿元が麻だと痛いのですから、絹にしたのではないでし

ょうか。絹は高貴なものだから庶民は着ないと思われていますが、そんなことはありません。絹は木綿よりずっと昔からあるのです。

「青によし奈良の山の……」(巻一七)や「青によし奈良山越えて」(巻二九)などは有名ですが、これは山の緑、つまり「青々とした緑」の意味で、藍とは関係ありません。「あたたかも似るか青きぬがさ」(二九卷四二〇四)という句は、藍を指すかどうかで文学者と意見が割れています。当時、傘は貴人が使うものでしたし、絹もまだ貴重品でした。ですから「青きぬがさ」とは「緑の木の下にいる状態」を指しているのかもしれないし、「青い絹の傘の下」という意味なのかもしれない。わからないのです。ですから「青衿」の句は貴

重なのです。

『万葉集』の成立時期には諸説ありますが、仁徳天皇の皇后磐姫(いわひめ)の作といわれる歌から759年(天平宝字3)の伴家持の歌まで約400年にわたる全国各地、各階層の人の歌が収められています。私たちは学校で習う『万葉集』を身近なものと感じますが、実は『古事記』や『日本書紀』よりも古い文献なのです。

漢字ではない「染」は 日本独自のもの

日本で藍染めがいちばん盛んに行なわれたのは、室町時代末期だったかもしれませんが。明(みん)から木綿(こゝろ)の種が入ってきたからです。麻よりも温かく、そして肌触りのよい木綿はどん

どん広がり、庶民も木綿の衣服が着られるようになりました。

1552年(天文21)に青屋四郎兵衛(徳島県)へやってきて、木綿と藍を一緒に栽培して人気を博します。

これは、四郎兵衛が「薬」と呼ばれる染料を用いたからだと言われています。

薬とは、蓼藍の葉を採って乾燥させて細かく切り、寝床(ねとこ)という土間に広げて寝かせて、水をかけながら発酵させる作業をおよそ90日続けてつくります。発酵させすぎると藍色の色素が傷むので、ひっくり返してまた水を打つ。春に種を蒔いて、まるで土のように見える薬が完成するのは12月から1月です。

薬は各地でつくられていましたが、特に阿波国の吉野川流域でつくられたものが質・量ともに秀でていたため「阿波藍」と呼ばれ、全国に出荷されていきました。

ここで注目したいのは薬という文字です。「草冠に染める」と書きますが、この文字は漢字ではなく国字です。つまり薬は大陸渡来のものでなく、日本人がつくったものなのです。ただし、いつ薬がつくられるようになったのかは詳らかではありません。



栃木県芳賀郡益子町にある「日下田(ひげた)藍染工房」の染め場。180L入る常滑焼の藍甕が72個並ぶ。藍甕に湯を張り、蓼藍からつくった薬、栄養分となるふすまや木灰などを入れると発酵が始まり、藍染めが可能になる。4個の藍甕の中央には「火床」と称する穴があり、籾殻などを燃やして温度を保つ。写真右は、藍甕にゆつくり布を浸けて色を染めている職人の小島卓磨さん(関連記事 pp.28-31)

せん。

「紺屋の白袴」の意味

薬は藍染めを専門とする「紺屋」が仕入れ、土のなかに埋め込んだ藍甕(あゐ)に発酵の栄養源となるふすまや木灰(ばい) (アルカリ) を入れ、1週間ほど発酵させます。この発酵は熟練を要する作業で、薬のインジゴ(注)を水溶性にして繊維にいったん吸着させて、再びインジゴに戻すことで染め



るのです。

藍染めが盛んになったのは、江戸時代に繰り返し出された幕府の奢侈(しゆし)禁止令の影響もありました。庶民は麻か木綿を着ることを強いられた光沢を帯びるような加工、そして紫色や紅梅色を用いることも禁じられました。天保の大飢饉のあとは白の木綿も禁止されるので、紺屋はますます増えていきます。険しい山のなかの村にも、かつて立派な藍甕をたくさん備えた紺屋がありました。

藍甕の染液は28℃が限度、できれば25℃がいいとされていますが、そうすると夏だけしか染めることができません。しかし、染液を28℃に保つために藍甕を四つ置き、その中心に籾殻などに火をつけて保温する方法を編み出したことで、冬期でも染めることができるようになりました。「紺屋の白袴」という言葉がありますね。紺屋が自分の袴は染めないで、いつも白袴をはいている——つまり「他人のことに忙しくて自分自身のこ

(注) インジゴ

本来はインドで栽培される含藍植物からとれる天然藍(インド藍)を指すが、そのなかに含まれる色素の物質名にもなっている。

かめのぞき
甕覗き

そらいろ
空色

みずいろ
水色

みずあさぎ
水浅葱

あさぎいろ
浅葱色

つゆくさいろ
露草色

はなだいろ
縹色

あいいろ
藍色

るりいろ
瑠璃色

こんじょう
紺青

かちいろ
勝色

こんいろ
紺色

こいあい
濃藍

のうこん
濃紺

とには手が回らないこと」のたとえとされていますが、実は紺屋が白い袴で仕事をしても染みはできません。藍染めは布や糸を藍甕へそつと下ろし、静かに引き上げるもの。飛び散るようにパシヤパシヤしたら、藍甕のなかのインジゴが弱って繊維に食いつけなくなるのです。つまり、染液を扱うけれど自分の白袴には染み一つつけないという「職人の意気」を表した言葉なのです。

「ジャパン・ブルー」と称された深く濃い藍色

1874年(明治7)に来日したお雇い外国人のロバート・ウイリアム・アトキンソンが藍染めの衣服を着ている日本人が多いことに驚いて、藍を「ジャパン・ブルー」と表現したことはよく知られています。

たしかに藍染めは多かったと思いますが、アトキンソンが驚いた理由には「当時のヨーロッパではすでに天然の藍染めが失われていたこと」もあつたはずだと私は思います。

しかも、日本の藍染めは濃い藍が中心です。本来、藍の中間色は「縹」で、それよりも濃ければ紺色、薄ければ水色ですが、特に江戸時代の日本人は濃い藍、つまり紺色を好んで着ました。なぜでしょうか？ 農業でもっとも大事なのは豊作ですね。豊饒な世界を望むわけです。その世界は「藍を深く深く染めることで可能になるのではないか」と考えた。ですから藍色をどんどん濃くしていったのではないのでしょうか。

農作業をするときに土が付くので、汚れを目立たせないように、という工夫もあつたでしょう。今でこそ水色や空色はきれいな色とされていますが、そういった色だと汚れが目立つので田畑には入れません。だから濃い藍色を好んだのです。今の日本人が見ても、濃い藍色は安定したのに見えます。

あるいは瞳の色も関係しているのかもしれませんが。例えば日本人から見るとヨーロッパの染織はきれいで華やかです。日本人の衣服は黒っぽくて渋い。渋いは地味とは違う深み

があります。濃い藍色を見ると「やっぱりの色が落ち着くわね」と感じるのが、日本人特有の感性なのだと思います。

藍色を育てた 列島の多彩な自然

蓼藍から効率よく色素を取り出して藍色に染めるために薬を生み出し、また藍甕を温める工夫で季節を問わず染められるようにした藍染めは、日本人の知恵の結晶です。また、江戸時代には藍染めの布を煮出して藍を回収し、煮詰めて棒状にした絵具「藍蠟」を書画や浮世絵などの彩色にも使うなど再利用もしてきました。

ところが今は薬から染めようとする人は少なくなっています。こうした文化をどう残すかは、私たち全員の問題だと思えます。薬を製造する藍師や藍染めの作家を人間国宝にすることも大事ですが、そうすると個人の問題に終始してしまふ。カギとなるのは、技をもつ人たちを地域で総合的に指定すること

です。例えば1974年(昭和49)に国の重要無形文化財に指定された沖縄県大宜味村喜如嘉の芭蕉布のような事例も必要でしょう。綿織物で藍染めが主体の久留米紬も総合指定されています。

私は藍色が好きで日本の各地を巡り歩き、本を書きました。「どの地域がよかったですか」とよく尋ねられますが、一つになんて絞れません。日本はどこに行っても美しいですね。雪深い北海道で雪のなかに手を入れたら、雪は水色に見えました。渚も薄い水色ですが、沖に行くにしたがつて濃い色になっていきます。沖繩で見た黒潮は、それはそれは深い藍色でした。今日は東京にいますが、空を見上げるときれいな空色ですね。

南北に長く、海に囲まれた日本列島はさまざまな色で溢れています。今、藍という色をあらためて考えると、この日本の自然が淡い青色から紺色に近いほどの濃い藍色に至る多彩な表現を育ててきたのだと感じます。

(2016年12月2日取材)



総論